

【書評】

ピエール・ブルデュー編
 荒井文雄・櫻本陽一 監訳
 『世界の悲惨』 I～III
 2019～2020, 藤原書店

佐山一郎[†]

フランスの社会学者、ピエール・ブルデューがパリ・サン＝タントワヌ病院で71歳の人生を閉じたのは、2002年1月23日水曜の夜。肺がんによる闘病が前年秋からつづいていた。

〈ブルデュー死す！〉を伝える報道については、2011年に翻訳刊行された『自己分析』（原題“Esquisse pour une auto-analyse”・'04年/加藤晴久訳/藤原書店）の訳者あとがき（p.176～）などに詳しい。哀悼と賞賛のコミュニケが当時のシラク大統領は元より、首相、左右諸政党、労組からもたらされる一方で、メディアからの評価は礼賛一辺倒でもなかったようだ。左翼系週刊誌『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』にあっては、社主のジャン・ダニエルからして批判のトーンを滲ませたそうである。そのみならず〈哀悼と賞賛のコミュニケに表れた反応自体がブルデュー社会学の「華々しい挫折」を証している〉——と断ずる副編集長ジャック・ジュリアルルのコラムも掲載された。

当該コラムのタイトルは「社会学の貧困」（La misère de la sociologie）——。

「階級闘争の教科書」といわれたマルクス『哲学の貧困』（La Misère de la philosophie）とブルデューらによるこの『世界の悲惨』（La misère

du monde）をかけたのこである。理非黒白の決着を避ける日本の文化風土ではなかなか考えづらい批評権の行使と言えるだろう。批判的性向が発達したフランス・メディア〔界〕は蓋棺事定の予定調和を平気で覆す。

日本では翌々日朝刊に遺影付きの死亡記事が掲載された。各紙訃報欄で紹介された著作は、出発点である『アルジェリア（の）社会学』（58年/日経）に始まり、教育社会学の視点によって68年5月革命を思想的に準備したといわれるジャン＝クロード・パスロンとの共著『遺産相続者たち』（64年/朝日）、『ディスタンクシオン』（79年/毎日、読売、日経）、『実践（的）感覚』（80年/朝日、毎日）、『ホモ・アカデミクス』（84年/日経）、『構造と実践』（87年/毎日）、『芸術の規則』（92年/読売）、『市場独裁主義批判』（98年/同）、さらには人類学的研究を踏まえてジェンダー研究に貢献した『男性支配』（同年/同）——などが挙げられた。

（*丸括弧内は、原書刊行年と訃報で書名を挙げた主要新聞社名）

20世紀を代表する社会学者ブルデューの翻訳第一弾は、藤原書店の藤原良雄社主が新評論編集長時代に世に問うた『構造と実践—ブルデュー自身によるブルデュー』（石崎晴己訳・88年）である。原書は81年から86年までの発言を収めたもので、さして大きくはない時間的ズレだった。87

[†] 立教大学社会学部兼任講師
 sa_y@j07.itscom.net

年に刊行された主著『ディスタンクシオン』I～IIが、同社創業翌年の90年に刊行されたときでさえ11年ほどの時間的ズレであったから、ここでとりあげる『世界の悲惨』の翻訳刊行には感嘆おく能わざるものがある。原書の刊行年は前世紀の1993年。上記著作群で言えば、『芸術の規則』と『男性支配』のあいだということになる。追悼刊行された加藤晴久編『ピエール・ブルデュー——1930-2002』（同・02年）にある主要単行本リストにも「近刊」の告知があり、完訳が待たれていた。

本書は、ミッテラン社会党政権（1981-1995）の末期に企画されている。預金供託金庫の財源保証で行われた聞き取りのほとんどが90年代初頭から92年4月頃までのものである。当時の通貨はユーロではなく、まだフランス・フラン。「テープ起こし」という言葉が今も残るようにカセット・テープレコーダーの使用が当たり前の時代だった。

本書第II分冊にはブルデュー自身による83年の聞き書き（p.795～「ベアルン地方の二人の農業者」）が収められている。「録音テープの保存状態が悪いため、面談の書き起こしは非常に難しく、時には不可能であった」という付記に曰く言いがたいものがある。版元のスイユ社も2004年に買収されて、今はサン＝ジェルマン＝デ＝プレのジャコブ通りでない。評者は、同書IIIの巻末に設けられた「本書の協力者について」でロジーヌ・クリスタンの没年を知ることになった。ブルデューとの協同作業で本書に貢献した女性である。

この大掛かりな調査プロジェクトには、男女合わせて64人のインタビューイが登場する。一方、参加協力した聞き手は総勢26人。900ページの原書と格闘した8人の訳者が名を連ね、総ページ数、1,533。価格も各冊4,800円の超大冊となっている。Iは、2019年12月31日。IIは、同年2月10日。IIIは2020年2月29日に刊行された。

発売後1年で10万部の売れ行きを示したことをIの巻頭に置いた94年のブルデュー・インタ

ビュー『世界の悲惨とは何か』（聞き手＝加藤）でまず知ることになるが、ここでは話し言葉の世界的隆盛があったことを押さえておきたい。

日本では、83年5月にスタッズ・ターケル『仕事！（ワーキング）』（晶文社）が11年の翻訳時間差で訳出され、95年（19刷）まで版を重ねた。

83年の「精神汚染」批判キャンペーンから「開放」に向かいつつあった中国国内にもターケルの影響は及んだ。『アメリカの夢—その喪失と発見』（80年）をはじめとする彼の一連の著作に触発された張辛欣（チャン・シンシン）と桑擘（サン・イエ）による『北京人』（上海文芸出版社・85年//邦訳『金は天から降ってこない：フツー人の中国』大里浩秋ほか訳/平凡社・87年）は、中国初の聞き書きルポだった。中国文学につきまとう政治的なバイアスを反映しつつの少数数刊行ではあったが……。

名インタビューアの誉れ高いターケルは『ヴィクトリア時代ロンドン路地裏の生活誌』（上）〈下〉（植松靖夫訳 原書房・2011年）で知られるヘンリー・メイヒュー（1812～1887）の影響を受けている。ターケルにバトンを繋いだことになるメイヒューは、1841年に始まるイギリスの週刊風刺漫画雑誌『パンチ』（W.ブライアント出版社）創刊メンバーの一人である。

その後のネット社会の勃興とともにジャーナリズムのオーラが消え、間隙を縫うようなかたちで登場したのが同じアメリカをルーツに持つ90年代以降のオーラル・ヒストリーだった。しかし素朴実証主義的な「誰でもできる記憶の記録」と本書は明らかに一線を画す。大きな違いは方法的手順の意図と原則をとことん突き詰めた点にある。

『世界の悲惨』の日本語版は7部構成（I：1～III、II：IV～V、III：VI～VII）である。そのうちのIV以外はブルデューによる解説論文が入り口になっている。全体構成においても、IからVIまでの各部ごとに社会学的分析が置かれ、その後に問いと答えによるインタビューの再現が続く。タイ

トルは、「女子工員」「アラブ系の若者」「優先教育地区の中学校校長」というふうで、職業や所属に関するものがごくシンプルに付けられている。それらにインパクトのある語りの一部、例を挙げれば、上記タイトルと対になるかたちで「ねえミュレール、あした妹の結婚式なんだけど、あしたも来なくちゃいけない？」(評者注・ミュレールは職工長の名) / 「いい人生やってますよ」 / 「今年は、ほんと、さんざん苦労させられました」というふうな雰囲気では抜き書きされている。読み手にもたらされるものは、抽象的な論文とは対照的な息遣いを伴う話し言葉との異化効果である。

面談記録に先立つ各項分析説明では、インタビューの前提となるべき論点が示される。文字量は3ページから25ページ。平均すると6ページ程度(400字詰原稿用紙換算で約13枚)となる。〈第I分冊第II部 場所の作用〉についていえば、まず、ブルデューが社会空間の構造と物理空間との関係について厳密な分析を試みている。次いでロイック・ヴァカンが「アメリカという逆ユートピアから」の表題を持つ論文で、「ゲッター」とフランスの荒れた郊外の問題との違いを示しつつ70年代半ばからのフランス・エリート指導層による新自由主義政策に批判を加える。それに続くヴァカンのインタビューに答えているのが、荒廃したシカゴのゲッターで悪事のよろず屋とも言うべき「稼ぎ人(ハスラー)」稼業のリッキー——という流れである。

同じ第II部〈場所の作用〉では、フィリップ・ブルゴワによるニューヨーク・ハーレム地区東部スパンニッシュ・ハーレムの解説とラモンという名の「ハーレムのプエルトリコ麻薬売人」への聞き書きが後に続く。「ただなんとか生きてりゃいいってもんじゃない、俺はちゃんと生きてたいんだ」というタイトルでの12ページ(約30枚)である。これら生インタビューの文字量は、2ページのものから最長で37ページ。平均すれば、16ページ程(約40枚)である。杓子定規な枚数制限を設けない手綱捌きが推察できる。

最終部の第III分冊VIIでは締め括るかのようにブルデューが登場し、「理解するとは」の表題で前述した方法的手順の意図と原則を解説する。フランス現代思想特有の晦渋な文体に耐えられれば、民族学から社会学にわたる彼自身の調査歴の成果とでも言うべきインタビュー論をそこで知ることができる。科学者不在の科学とする世論調査への批判がここでも繰り返されるが、「文字表記の危険」の項(p.1416-)はとりわけて貴重だ。「加工」や「調整」を伴う面談の転記作業が精緻過ぎるほどに理論化されてゆくからである。自分自身の客観化の必要を説くブルデューは「最も忠実な書き起こしでもすでに正真正銘の翻訳であり、解釈でさえある」「書き起こすということは必然的に、書き直すという意味で書くことである」と奥義の如くに述べている。

それにつけても原書刊行から27年である。大きな話題を集め、当時はお芝居としても上演もされたという『世界の悲惨』も最早アーカイブの領域と言える。68年春に出航した南米移住船あるぜんちな丸を追いつけるNHKドキュメント『移住50年目の乗船名簿』(番組ディレクター:相田洋)のような後日談(追跡聞き取り調査)の期待があってもよいが、日本だけに限らず面談記録の現在地は悲惨である。『世界の悲惨』は、聞こえてくることのない巷の苦しみに言葉を与えて語らせる調査プロジェクトだった。そのときブルデューは極端に不幸な人とあまりにドラマチックな人をあえて外す方針をとっていた。

本書を援用して教師や学生といった普通の人々へのインタビューをたちあげるにしても、被調査者の多くが実名による公刊を許してくれそうにない。2003年に個人情報保護法が成立して以来、拡大解釈と過剰反応による国民の精神的萎縮が始まっているからだ。個別的感性の磨耗という点では、メディアにも同じことが言える。会見現場での手書きメモと鋭利な質問が廃れるきっかけになったのは、2008年の第34回主要国首脳会議(G8北海道洞爺湖サミット)で、政権側からパ

ソコンが記者クラブに配られたのがきっかけだったという。——（参考：田崎史郎『安倍官邸の正体』（講談社現代新書・2014年）

「項目によっては現在の状況と異なることもあ

るので注意を要する」と本書の解説にはある。ならば90年代との相違点は奈辺にありや。〈いのち〉輝く共的交換＝インタビュー＝面談調査の意味がますます問われている。